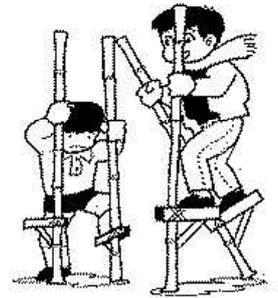


悲しい昔話③

いっしょに竹馬たけうまで遊んだ子ども時代からの友だちのことを「竹馬の友」と言います。しかし、読み方は「ちくば」と言います。

私にもそのように言える友だちがいます。保育園の年少組からですからもう半世紀以上になります。保育園へは毎朝声かけ合っ*て*いっしょに通園しました。当然まだ社会性も協調性も育っていない子どもどうしのことですからけんかもいっぱいしました。同じ数だけ仲直りもしました。



小学校低学年の時に事件が起きました。今でも私の心の中に小さな灰色の点として残っています。事件の概略はこうです。

幼い子ら数人で道路の石を拾ってどこまで遠くへ投げられるかの遊びをしました。当時の道路は砂利道じゃりみちだったので石ころはいくらでもありました。さて遊びは発展してこそ楽しいのです。次は道路沿いに続く畑に向かって投げることになりました。善悪の判断はあったようななかったような年頃です。そのうち畑の作物(たぶんキャベツだったと…)に命中させることが競技の中心になってしまいました。十分遊んだ後の畑は様子が一変していました。収穫間際の手入れの行き届いた作物は壊滅状態でした。幼心にも畑の状態からしてどことなくばつの悪さを感じながら家に帰りました。

当然、その晩は涙の夕食でした。父親はいなかったので、母親は何かあれば父親の分まで私をしかったです。手を引くというより、引きずられるようにして畑の持ち主の家に連れて行かれました。母親に頭を押さえつけられ玄関の湿った冷たい土間どまに手をついた時、初めて「悪いことをしたんだ」と思いました。「今回は許すけど、もうしちやいかんぞ」というようなことを持ち主の『じいさま』に言われたと記憶します。月明かりの帰り道母親は口を利きませんでした。おそろおそろ上目遣いで見た母親は確かに泣いていました。心から悪いことをしてしまったと思ったのはこの時でした。

泣いて泣いて泣いて寢床についたとき、ふと頭をよぎったことがありました。この畑の息子(竹馬の友)もいっしょに石を投げていたのです。

しかし、朝になってもそのことを母親には言いませんでした。今日に至るまで、この友が『じいさま』に自分もその場にいたことを言ったのか言わなかったのかは分かりません。

ま、仮に彼が正直に『じいさま』に言ったとしても私の罪は変わらないわけで…
ともかく、今でも「竹馬の友」です。